

ヴィクトル・セガレンのエグゾティスムと 三つの長編小説

高岸敦夫

はじめに

今日においてエグゾティスム *exotisme* という言葉は他者に対するロマン主義的で現実からかけ離れた認識を構築してきたものとして否定的な意味で使われることが多くなった。しかし異国趣味文学の全盛期であった20世紀初頭において、エグゾティスムについてを考察し、安易な異国趣味とは一線を画す概念へと定義しなおそうとした人物がいる。それは異文化に対して独特のアプローチを試みようとしたことで近年になり高く評価されるようになった作家ヴィクトル・セガレン (Victor Segalen, 1878–1919) である。彼はエグゾティスムというものを世界の多様性への認識にまで高めようとしたのであるが、ここではそうしたセガレンの文学作品におけるエグゾティスムの実践を分析していくことにする。取り上げるのは長編小説と呼ぶことができる3つの作品『記憶なき民』(*Les Immémoriaux*, 1909)、『天子』(*Le Fils du Ciel*, 1975)、『ルネ・レイス』(*René Leys*, 1922)である。

1. セガレンのエグゾティスム

まず作品の分析に入る前に、セガレンのエグゾティスムについて簡単に考察しておく。セガレンはエグゾティスムの理論を確立したというわけではないが、彼は1904年以後未完のエッセー『エグゾティスムに関する試論』(*Essai sur l'Exotisme*) を書き続けていた。そこから彼の考えや試みはある程度までは窺い知ることができるのである。彼のエグゾティスムへの探求はまず当時隆盛を極めていた異国趣味あるいは植民地文学への反発から始まったが、とりわけ批判の対象としていたのがピエール・ロティやポール・

クローデルである。前者は自己を優越的な場所において得体の知れない他者をおびたしい紋切り型で受け止めるだけの観光者であるとして、セガレンは批判する。後者はそのカトリック主義、西洋中心主義を何ら疑うことをなく、異質なものを自己の内に還元していく姿がセガレンにとって許されるものではなかったのである。¹⁾

一方セガレンはエグゾティスムという語から連想される椰子の木や砂漠といった紋切り型なイメージを排除しようとする。そうした上で彼はエグゾティスムについて次のように定義する。

Que ceux-là goûteront pleinement l'admirable sensation, qui sentiront ce qu'ils sont et ce qu'ils ne sont pas.

L'exotisme n'est donc pas cet état kaléidoscopique du touriste et du médiocre spectateur, mais la réaction vive et curieuse au choc d'une individualité forte contre une objectivité dont elle perçoit et déguste la distance. [...]

L'Exotisme n'est donc pas une adaptation ; n'est donc pas la compréhension parfaite d'un hors soi-même qu'on étreindrait en soi, mais la perception aiguë et immédiate d'une incompréhensibilité éternelle.²⁾

セガレンにとってエグゾティスムとは主体と客体との衝突によって生起される奇妙な反応のことである。セガレンが目標としたのは他者との差異を完璧に理解しようとするのではない。逆に永遠に理解不可能なもの、自己の思考に還元不可能なものを知覚し、それとの距離を測ろうとしようとしたのである。すなわち理解不可能なものを切り捨てない、自己の認識の中に押し込めるのでない方法を模索した。世界をひとつの世界に統一させるのではなく、理解できない不透明なものと出会ってもそれを不透明なものとして受け入れる。それと衝突しながらも、それを尊重する。こうすることによって世界の多様性を享受することができるとセガレンは考えたのである。

2. 『記憶なき民』

セガレンは 1902 年から約 2 年の間、海軍軍医としてポリネシアを旅した。そこでゴーギャンの影響を受け、彼自身もタヒチの人々を描くことを構想した。こうして書き上げられ、1909 年に発表されたのが『記憶なき民』である。この作品は 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのポリネシアの主にタヒチを舞台として、先住民であるマオリ族の伝統文化の破壊と衰退のプロセスを描いた民族誌的な小説である。作品の中ではマオリ語の語彙や表現がほとんど何の説明もなく大量に使われ、マオリ人の知識・常識・宗教観・生活観が特徴づけられたものになっている。そのことから物語がマオリ民族の視点から描かれ、マオリ流に語られるとすることができるであろう。語るべきものと語られるべきものの関係が転倒し、ヨーロッパ人から来た白人は「青白い肌をした異人たち」などと呼ばれる。マオリ人の方が主体となり、ヨーロッパから来た白人は得体の知れない他者として描かれるのである。そうしたことからモロッコの作家で評論家のアブデルケビル・ハティビは『記憶なき民』の主人公テリイについて「征服者を観察し、そのパロールその行為の奇妙さについて質問する。かれはいながらにして民俗学者となる。しかもどんな民族学も生み出しえなかった民族学者である」³⁾と述べている。ここではこうした『記憶なき民』の特徴の例としてジェイムズ・クックの死について書かれた箇所を挙げておく。

Le plus lointain parmi ses souvenirs lui racontait l'atterrissage, dans la baie Matavaï, de la grande pirogue sans balancier ni pagayeurs, dont le chef se nommait Tuti. C'était un de ces étrangers à la peau blême, de l'espèce qu'on dit « Piritané » parce qu'ils habitent très au loin, une terre appelée « Piritania ». Tuti frayait avec les anciens Maîtres. Bien qu'il eût promis son retour, on ne le vit point revenir : dans une autre île maori, le peuple l'avait adoré comme un atua durant deux lunaisons, et puis, aux premiers jours de la troisième, dépecé avec respect afin de vénérer ses os.⁴⁾

ここで書かれている«Tuti»とはクックのことであり、「Piritané」はイギリス人、「Piritania」はイギリスのことである。上の引用文はセガレンの研究者で『記憶なき民』の翻訳も出した木下誠がこの作品の特徴を表す好例としてよく引き合いにしているものである。木下はここで記述が正確であることとヨーロッパ人の偏見を排除してマオリ人としての本当らしさでもって描かれていることを強調している。⁵⁾ 確かにこのジェイムズ・クックの記述においては、クックの最後の航海に同行していたクラーク船長の証言や宣教師ウィリアム・エリスなどの複数の文献を参照し、さらにこれを批判的に精査した上で上記の引用文のような記述にしたのである。しかしそれでもこの記述には作品の限界ないしは問題点も露呈しているようにも思われる。セガレンのこの記述はクックがハワイの先住民に神と崇められたことを結果として強調するものとなっている。⁶⁾ 今日の日から見てもこの記述は否定されるものではなく、J.C.ビーグルホールやマーシャル・サーリンズのような著名なクック研究者や人類学者がハワイ先住民によるクックの神格化説を展開させている。しかし1990年代になってこうした説を西欧による帝国主義的な作り話だとする批判が出てきたことも留意しておく必要があるだろう。例えばクックの神格化に批判的な山中速人は次のように指摘している。

このような征服壇の背後には、神と身間違えられるに値する白人種というヨーロッパ文明の優越が横たわっており、その一步にただの人間を神と見間違える未開文明の愚かさの暗喩が潜んでいる。

征服壇が征服する側の文字を持った人々によってしか記述されていないという事実は、その神話性をより確実なものにしている。それは、征服者が自分たちが征服を行うに値する民族であることを正当化するために必要な免罪符のようなものであった。文字を支配する側が一方的に持たないものの愚かさを記述するのである。正しく美しく聡明なものはすべて征服者の側に、愚かで醜く不当なものはすべて先住者の側にふるい分けられたのである。⁷⁾

セガレンの作品では、神に見違えられたクックの偉大さを示しているというよりも、他者を恭しく扱った（ハワイの）マオリ人の礼節を称えるものとなっている。⁸⁾ しかしヨーロッパ人の文献に大きく依存して書かれたという事実が、一連のクック神格化批判と照らし合わせると、問題が浮き彫りとなってくるのである。セガレンは山中と同じような問題意識を持っていたゆえに、『記憶なき民』によって文字を持たなかった先住民の歴史を先住民の側から描き出そうと腐心した。しかしそんな彼が書いたものであってもヨーロッパ中心主義や文字を持った文化を優位なものとする価値観によって捏造されたものを取り入れてしまったという可能性は残されるのである。

とはいえ『記憶なき民』は単に正しいマオリ民族の歴史を描くことを意図しただけでなく、フランス語・フランス文学といった既存の枠組みから逸脱することを目指したものともいえるであろう。ハティビは『記憶なき民』を「民族研究でも、植民地文学でもなく、私の言語、私の想像上の空間に他者の場所を受け入れる『外部』のエクリチュール」⁹⁾ と述べている。ハティビが指摘するように、セガレンは『記憶なき民』で彼の外部にあるものをフランス語やフランス文学の中に還元することなく、フランス語で表現するということを目指したともいえるものとなっている。すなわちいわゆるポストコロニアル文学批評で取り上げられる作家と共通する試みがなされているのである。

3. 『天子』

『記憶なき民』を刊行した以後、セガレンの関心は主に中国へと向けられる。とりわけ彼は当時入ることが極めて困難だった紫禁城や当時亡くなったばかりであった光緒帝に魅せられた。こうして 1910 年から執筆されたのが『天子』であるが、これは未完のままに終わっている。『天子』はその光緒帝の生涯を描いた作品であり、年鑑記録者 Annaliste による公にはされない秘密の年代記という体裁となっている。年鑑記録者とは天子の傍に仕えて、天子が書いたものを書き写し、それに注釈をつける、また天子

の身の回りの出来事を書き記す、といった役目を負う。しかしこれは架空の人物であり、すべてはセガレンによる創作である。セガレンは『小説の新しい形式、あるいは新たなエッセーについて』(*Sur une forme nouvelle du roman ou un nouveau contenu de l'essai*) というエッセーの中で« mon annaliste du *Fils du Ciel*, personnage imaginaire sans doute, mais moins absurde que mon intrusion a moi, là-dedans ! »¹⁰⁾ と述べている。セガレンはヨーロッパの人間が紫禁城の内部に入って天子について語るというのを馬鹿げたこととして退ける。そして紫禁城の内部にいて不自然でなく、謎に満ちた光緒帝の身の上を語るにふさわしい人物として年鑑記録者というものが生み出されたのである。以下で挙げる例は天子によって書かれた詩と年鑑記録者による注釈である。

Même jour. Écrit tombé de Son pinceau :

La pluie qui va pleurer se retient.

La grue qui s'élançait a fermé les ailes.

Moi, penché sur l'Empire je retiens mon envol,

Et de vertige, je ferme les yeux.

Commentaire de l'Annaliste :

L'Empereur veut sans doute indiquer par ces vers l'émoi convenable dont le Fils du Ciel est saisi quand il envisage, comme d'un lieu très élevé, toutes les charges qui l'attirent. Cette pensée est pleine d'à-propos. Le sentiment et la calligraphie sont bien du mode poétique.

De tels jeux manifestent un Empereur très érudit.¹¹⁾

このように年鑑記録者は天子が書いた詩の詩法や詩想を読み解いていくことを行なう。つまり天子の詩の批評を行うわけである。しかしながら年鑑記録者は天子の意図を必ずしも正しく理解しているとは言えず、両者の間

には大きなずれが生じることがしばしばある。時には年間記録者自身が天子の書いた詩を理解できないと素直に認める場合すらあるし、天子とそれに使えるものとの主従関係もあり年鑑記録者の注釈が彼の本心なのかどうかも疑わしい。¹²⁾ 年鑑記録者は天子の心の内まで見通すことができなければいけないが、実際には年鑑記録者にとって天子は自分の思考のうちに還元できない、理解不可能なものを持った他者であるという関係になっているのである。

また客観的に叙述せねばならないはずの出来事や事件に関しても、中国人の主観を色濃く反映させたものになっている。この時代は日清戦争や義和団事件などが起こり、清朝の歴史の中でもとりわけ激動の時期であったのだが、それらのことはあくまで紫禁城に住む一人の中国人の視点によって語られているのである。ここでは日清戦争で講和条約が結ばれたことについて書かれたものを例として挙げておく。

La vertu et le courage de l'Empereur ont porté leurs fruits. La Capitale et l'Empire sont saufs. La paix se prépare, plus glorieuse d'avoir été plus inquiétée.

Les Nains ont accepté à l'improviste les offres qu'ils refusaient auparavant, car ils ont appris la Fermeté du Fils du Ciel et en ont craint le retentissement. Ces orgueilleux pleins d'injures, ces avides, ces insolents, les voici, — en échange de quelques acres de terrains stériles dans le Leaotong, en échange d'une île barbare peuplée de serpents et de sauvages crus, en échange de quelques milliers de taels d'argent qu'on leur jette en pâture, comme aux porteurs de chaise qui réclament, — les voici, s'engageant soudain à rappeler leurs troupes en désordre, à retourner chez eux.¹³⁾

数千テールの銀貨 quelques milliers de taels d'argent とあるが実際は2億テールであり、またここでいう« une île barbare peuplée de serpents et de

sauvages crus »とは台湾のことである。このように事実関係に明らかな誤認があり、他者に対する露骨な偏見や差別感が垣間見られるようになっている。セガレンは資料を入念に調べさえすれば客観的で絶対的な真理に辿りつけるといような考えを持っていなかった。そのため歴史を叙述するにはそれを語るにふさわしい人物や文化の色眼鏡をつけなければいけないと考えたのである。天子と年鑑記録者（あるいは年鑑記録者と読者）との間にある歪みは読者が想像で埋めていく他はない。

4. 『ルネ・レイス』

『ルネ・レイス』は1913年頃から『天子』と並行しながら書かれたものだが、これもまた未完のままに終わっている。『天子』と同様に紫禁城の内部をテーマにしているが、語られるべき他者の内側から他者を描こうとした『天子』とは逆になっている。つまり『ルネ・レイス』では西洋人が他者への接近を試みるが、他者を自己に還元することができない有り様が描かれているのである。『ルネ・レイス』はヨーロッパから来た男の視点で紫禁城の外部から内部を探求しようとする物語である。語り手は光緒帝の伝記を書こうとしている人物であり、その彼によって書かれているノートという体裁をとっている。そしてその語り手の名前はヴィクトル・セガレンである。つまり『ルネ・レイス』の作者とこのノートの作者は同姓同名ということになる。実際のセガレンと『ルネ・レイス』のセガレンは全くの同一人物ではないが、ほぼ同じ人間であるということができる。その冒頭は次のようなものである。

Pei-king, 20 MARS 1911 — Je ne saurai donc rien de plus. Je n'insiste pas : je me retire... respectueusement d'ailleurs et à reculons, puisque le Protocole le veut ainsi, et qu'il s'agit du Palais Impérial ; d'une audience qui ne fut pas donnée, et ne sera jamais accordée...

C'est par cet aveu, — ridicule ou diplomatique, selon l'accent qu'on lui prête, que je dois clore, avant de l'avoir mené bien loin, ce cahier dont

j'espérais faire un livre. Le livre ne sera pas non plus. (Beau titre posthume à défaut du livre : « Le Livre qui ne fut pas ! »)¹⁴⁾

『ルネ・レイス』はこのように本を作ることが不可能であるという告白から始まる。セガレンは『天子』を執筆する一方で、『ルネ・レイス』で紫禁城の内部を知りえない自分には光緒帝の伝記を書くことが不可能性について書いているのである。ただし当然のことながらここで本当にノートが閉じて終わってしまうわけではない。彼は紫禁城内部の秘密を探ることをあきらめることができず、中国語を身につけることができたなら何とか入り込めるのではないかを思い、中国語を習い始める。そしてその先生として選んだのがベルギー人の青年ルネ・レイスである（それからあと一人中国人の王という人が先生となる）。そして語り手はこのあとルネ・レイスから紫禁城のことに関する驚愕の事実を次々と聞かされる。自分は秘密警察のものである、皇妃（つまり未亡人となった光緒帝の妃）の愛人になった、皇妃は自分との子を孕んでいる、といったことをレイスから聞かされるのである。この作品において語り手は他者に対して主導権を握ることができず、無力な存在となっている。語り手はルネ・レイスの打ち明け話を記録していくが、語り手が紫禁城の内部事情に関して知っていることというのはルネ・レイスから聞いて得た情報であり、実際にその目で見て知ったことではない。これをセガレンの研究者マルク・ゴントールはロチの『お菊さん』と比較して次のように述べている。「ロチの小説の独話的な論理とは反対に、セガレンはかくしてこの他者への接近のなかに、対話的で多声的な物語を成立させることになる。そこでは、自己は沈黙に還元され、ルネ・レイスを媒介にして、パロールのイニシアチブは他者にゆだねられる。」¹⁵⁾ それでも『ルネ・レイス』の語り手は相当な事情通になったと思うのだが、後になってルネ・レイスの話は作り話であったということがわかり、またルネ・レイスは謎の死を遂げる。つまり知るはずもない紫禁城の内部、光緒帝の身の上を年鑑記録者というものを創造して描いた『天子』に対して、『ルネ・レイス』は紫禁城内部の秘密を探ろうとするが結局は、紫禁城が

不透明なものとして残されたままとなるのである。そしてまたルネ・レイスの話が完全な嘘であるという確信も持つこともできない。語り手にとっても、読者にとっても、真実と嘘、現実と想像の境界がよく分からぬままに作品が閉じられてしまうのである。

このルネ・レイスにはモデルになったという実在の人物がいる。モーリス・ロワという名の青年で、セガレンは北京に滞在しているときに彼と知り合いになった。そしてセガレンは『ルネ・レイス』のレイスの打ち明け話と同じようなことを彼から聞かされたのである。そしてセガレンは1910年6月から同年10月までの間にモーリス・ロワから聞かされた打ち明け話を『モーリス・ロワによる秘録』(*Annales secrètes d'après Maurice Roy*)と名づけた日記に記したのだが、その日記を基に『ルネ・レイス』というフィクションが作られたのである。またセガレンは光緒帝の友人であったというモーリス・ロワから彼の晩年の身の上話を聞かされ、セガレンの方はモーリス・ロワに『天子』の草稿を読んで聞かせ、彼に意見を求めるということもあったといわれている。このように『ルネ・レイス』やその背景となるものの中には現実と想像が錯綜し、激しく衝突するものとなっているのだが、それを最も象徴的に物語っているものが『ルネ・レイス』の語り手が最後にレイスの作り話について推論する場面にある。

René Leys, fils économiste d'épicier belge, ne songeait guère aux Chinois, encore moins au Palais quand, première fois, je l'ai pris pour confident du mystère du Palais... Il est vrai que sa réponse dépassait déjà mon attente. C'est moi le premier, qui, sur la foi de Maître Wang, l'entretins sur l'existence d'une Police Secrète : huit jours après il en faisait partie, et m'enrôlait au bout de deux mois. Les attentats à la vie du Régent ne m'appartiennent pas : on les lisait dans tous les journaux, mais je m'accuse de cette question répétée :

— Dites-moi, Leys : une Mandchoue peut-elle être aimée d'un Européen... et... » — Et quinze jours après il était aimé d'une

Mandchoue...

Enfin, enfin, je m'accuse de lui avoir tenu, voici quatre jours exactement, le propos trop suggestif : « Pensez donc au poison »... Il a répondu : « Merci de m'y avoir fait penser »... m'a pris au mot et ne s'est pas démenti.¹⁶⁾

このように秘密警察の話をもルネ・レイスにしたなら、しばらくすると彼は秘密警察のものになった、満州女がヨーロッパ人に愛されるということがあるのかと彼に質問したら、しばらくして彼は皇妃の愛人になった、彼に毒の話をしたなら、彼は毒死した、というように語り手は自分が期待していたことをルネ・レイスが察知して、それを具現化していったのだと思うようになる。つまり語り手が想像していたことを、ルネ・レイスが現実のものにしていった、と語り手は想像するのである。

『ルネ・レイス』で描かれているこうした現実と想像の衝突はセガレンのエグゾティスムにちょうど対応したものとなっている。¹⁷⁾ 想像のものは現前の感覚器官で知覚されず、純粋な思考によってしか感じることができない。反対に現実のものは純粋な思考ではなく、感覚器官によって感知される。つまり両者の衝突によって、どちらかがもう一方を消し去ろうとするのではなく、相互作用によって両者の力が増していくとセガレンは考えるのである。

おわりに

以上で『記憶なき民』、『天子』、『ルネ・レイス』におけるセガレンのエグゾティスムの実践について述べてきた。彼は自身の作品において物語世界すべてを見渡すことができる絶対者の存在を否定し、西洋中心主義的なヴィジョンを崩していった。古のマオリ人や紫禁城の中に住む中国人などの視点から作品を書くことによって、他者の透明性に入り込み、そこから別の世界感を見渡そうとした。またその一方で『ルネ・レイス』では他者を自己の中に完全に取り入れることの不可能性を描いた。これらの作品に

は主体と客体あるいは自己と他者、現実と想像、真実と虚構、語り手と聞き手、といった様々な二項対立がある。しかしそこには両者の衝突によって起こるダイナミックな相互作用・相互浸透が展開されている。このような作品の創作によってセガレンはエグゾティズムの探求を続け、発展させていったのである。

(博士課程後期課程)

注

- 1) « Donc, ni Loti, ni Saint-Pol Roux, ni Claudel. Autre chose ! Autre que ceux-là ! Mais une vraie trouvaille doit être simple... et d'abord, pourquoi *tout simplement*, en vérité, ne pas prendre le *contre-pied* de ceux-la dont je me défends ? pourquoi ne pas tenter la *contre-épreuve* ? » (Segalen, V., *Essai sur l'Exotisme*, dans *Œuvres complètes*, tome 1, Robert Laffont, 1995, p. 746).
- 2) *ibid.*, pp. 750-751.
- 3) ハティビ、アブデルケビル (渡辺諒訳) 『異邦人のフィギュール』水声社、1995、p. 37.
- 4) Segalen, V., *Les Immémoriaux* dans *Œuvres complètes*, tome 1, pp. 107-108.
- 5) セガレン (木下誠訳) 『記憶なき民』水声社、2003 の解説、及び『『記憶なき民』の記憶』、『現代思想 1997年1月号』、青土社を参照。
- 6) こうした神格化の問題に対してポリネシアの神々に対するヨーロッパ人の誤解が背景にあるのではないかという指摘もあり、セガレンが«*atua*»という言葉を使っている意義についても考慮する必要があるかもしれない。「キリスト教的にハワイ人の信仰を理解しようとした宣教師たちは“アクア”という言葉を誤って“神”だと思い込んでしまった。実際には“スピリット”にずっと近い、まったく非西洋的な意味合いを持つ言葉であったのに。西洋との接触前のハワイには、肉体から分離した超自然的な領域という感覚は存在しなかったのではないだろうか。むしろ“アクア”は、自然界に存在する先祖伝来のスピリットであり、非常に強力ではあるが、普通に持っているのと変わらないものなのである。」(トニー・ホルヴィッツ (山本光伸訳) 『青い地図』下、バジリコ、2003、pp. 348-349).
ちなみにハワイ語では«*atua*» (アトゥア) ではなく«*aqua*» (アクア) と言う。
- 7) 山中速人 『イメージの〈楽園〉』、筑摩書房、1992、p. 16.

- 8) クックに関しては他に次のようなものがある。「Les hommes de Mouna-Roa ont été bien avisés! Pourtant, le chef Tuti ne lançait pas de maléfices! mais vous, depuis — non pas deux lunaisons — des centaines, vous honorez avec persévérance les maîtres survenus. Quand donc vous partagerez-vous leurs os? » (Segalen, *op.cit.*, p. 213). これはマオリ人たちがロンドン伝道協会の宣教師の意のままになっていることを伝統主義者のパオファイが非難する時の台詞である。
- 9) ハティビ、*op.cit.*, p. 37.
- 10) Segalen, V., *Sur une forme nouvelle du roman ou un nouveau contenu de l'essai* dans *Œuvres complètes*, tome 2, Robert Laffont, 1995, p. 590.
- 11) Segalen, V., *Le Fils du ciel*, dans *Œuvres complètes*, tome 2, p. 332.
- 12) 例えば次のような天子の詩の注釈もある。「L'Empereur seul a ce droit de formuler les caractères dont l'emploi soit innatendu, et des enchaînements non prévus. Il est permis de vénérer alors ce qui serait impie, écrit par d'autres hommes. » (*ibid.*, p. 343).
- 13) *Ibid.*, p. 369.
- 14) Segalen, V., *René Leys*, Gallimard, Collection Folio Classique, 2000, p. 39.
- 15) ゴンタール、マルク (渡辺諒訳) 「ロチとセガレンにおける他者の虚構化—『お菊さん』と『ルネ・レイス』」、三浦信孝編『フランスの誘惑・日本の誘惑』、中央大学出版部、2003、p. 80.
- 16) Segalen, V., *op.cit.*, pp. 278—279.
- 17) ハティビも「現実と想像の対立は、〈エグゾット〉の経験の基礎となるだろう」と述べている。(ハティビ、*op.cit.*, p. 44).